

2013. 6. 10.

日本コミュニケーション学会九州支部

KYUSHU CHAPTER of The Communication Association of Japan (CAJ)

# NEWSLETTER No.23

June 2013



事務局： 住所：850-8506 長崎市片淵 4-2-1 長崎大学経済学部 丸山真純  
Tel:095-820-6376 Fax:095-820-6376 E-mail: kyushu@caj1971.com

**CAJ 九州支部第 20 回記念大会は 9 月 28 日、長崎でお会いしましょう！**

## 支部長挨拶：1年間の振り返りと今年の活動

支部長：伊佐 雅子（沖縄キリスト教学院大学）

早いもので5月の連休も終わり、会員のみなさまはご家族と楽しい時間を過ごされたことと思います。沖縄ではこの時期、先祖を供養する清明祭が行われていますが、今年は例年になく、涼しく感じられます。夏を象徴する「かりゆし」ウェアの着用も、今年は少し遅れ、4月末となりました。



九州支部の役員の任期は2011年10月からスタートし、今年の9月で2年の任期を終えます。兼本円支部長の後を引き継ぎ、あっという間の2年間でしたが、我々役員は協力し、それぞれの持ち場で仕事をこなしてきました。まず、最初に手掛けたのは、過去2年間、諸事情によりなされていなかった会計報告でした。丸山真純事務局長は過去の会計のヒヤリングを行い、この2年間の決算報告書を作成することができました。そのおかげで、本部より支部活動助成金と支部大会助成金をいただけることになり、安堵いたしました。

九州支部の主な活動は、支部大会の開催と支部紀要「九州コミュニケーション研究」（電子ジャーナル）の発行です。昨年度は以下のことを実施しました。

第19回九州支部大会は2012年10月6日（土）、熊本学園大学を会場として開催しました。大会テーマは「国際化の時代を生きるーコミュニケーション学にできることー」でした。佐藤勇治大会委員長のもと、基調講演として開発経済学がご専門の Maung Maung Lwin 先生（同大学経済学部教授）に、「Globalization and Developing Countries: A Preliminary Focus on

Communication Ability and Research Findings”という演題でお話しをしていただきました。特に、途上国におけるグローバル化の影響や発展途上国の貧困の状況を理解することができました。また、村落調査においては現地の文化を理解し、現地の人々といかにコミュニケーションを図ることが重要かということ学びました。国際化の時代には経済の問題が大きく取り上げられますが、経済を動かしているのは人間であり、貧困問題も異文化の人々とのコミュニケーションにより解決へ導けるのだということを実感しました。

次に、紀要『九州コミュニケーション研究』の発行です。第10号は編集委員長の兼本円先生のご尽力により、今年3月末に無事発行できました。支部のホームページをご覧ください。今回は研究論文3本と研究発表論文1本です。応募して下さった執筆者の方々と査読者の先生方、また校正に携わって下さった吉武正樹先生に御礼を申し上げます。紀要は他の支部では発行していませんので、九州支部のアイデンティティともいえます。なお、論文の投稿は支部会員だけではなく、他の支部の方々にも開かれておりますので、次号(第11号)には多くの方々の投稿をお待ちしております。

また、昨年の大ニュースは、2006年以降、休刊となっております、「CAJ九州支部のニューズレター」を復刊させたことです。編集責任者の清水孝子先生と副支部長の宮下和子先生が担当され、第21号(5月31日)と第22号(12月25日)を発行できました。第22号には特別寄稿が2本あり、吉武正樹先生による「「大人」なロムニー」と宮下和子先生による「ハワイ大学からソウルへ、圧倒的な韓国パワー」を掲載しています。会員の方より、ニューズレターの内容が充実しているとお褒めの言葉をいただきました。先輩方の知恵と九州支部の良き伝統を引き継ぐとともに、新たな企画をとり入れることができ大変よかったですと思っています。今後も創意工夫をし、会員の方々との情報交換に役立ち、また、読み物としても楽しめる内容にしたいと考えております。

次に、九州支部のPR活動です。ホームページ担当の横溝彰彦先生はコンピューターに精通されているので、随時、支部大会のお知らせ、支部のニューズレター、紀要などをホームページ上にアップして下さいます。九州支部の活動を積極的に外に向かって発信できるのも先生のおかげです。CAJ本部の報告によれば、九州支部のホームページへのアクセスは国内・海外から多くみられるそうですので、今後もより充実した内容をタイムリーに発信していきたいと思っております。

最後に、本年度の活動のお知らせです。今年の支部大会は9月28日(土)に長崎純心大学で開催いたします。大会実行委員長はかつてCAJ本部と支部の運営に積極的に携わられた畠山均先生です。第1回九州支部大会が1994年10月2日に長崎純心大学で開催され、今年、20年という記念すべき大会を同大学で開催できるのを大変うれしく思います。大会テーマは「異文化交流とコミュニケーション」で、基調講演と研究発表に加え、特別企画も考えています。基調講演は長崎純心大学比較文化学科の片岡瑠美子教授で、16世紀、長崎に在したセミナリオ・コレジヨで実践された教育についてお話していただきます。会員の方や院生の方々、また、講演や研究発表に興味のある方など多くの方々の参加をお待ちしております。

2013年3月の九州支部の会員は56名で、関東支部(187人)と関西支部(79名)に次いで3番目に多い団体です。最近の支部大会では大学院生の方々の発表が目立っておりますが、まだ会

員増にはつながっておりません。前回のニューズレター(No.22)でも佐藤勇治先生が指摘されているように、会員をいかに増やしていくかが今後の支部の課題です。最近では、自校学(地域学)を教える大学が増えてきていると聞いています。九州では沖縄を入れると8県ありますので、将来は8県の地域の特性を掘り起し、コミュニケーションの観点から研究し、この成果を、何かの形で、まとめることができないかと考えております。また、今後は、学生のみならず社会人を対象とした企画も検討したいと考えております。

皆様からのご意見やご要望をお待ちしております。支部活動は「永遠に不滅」ですので、九州地域の特性を生かし、地域から世界に発信していく研究活動をしたいと考えておりますので、今後ともご協力のほど、よろしくお願い致します。



## 前途遼遠 - 原点を振り返り、将来を見据えよう 第20回記念支部大会を前に

支部大会実行委員長：畠山 均(長崎純心大学)

第1回CAJ九州支部大会が本学で開催されたのが1994年10月。それから1年あまり遅れて1996年1月に支部ニューズレターの第1号が発行されました。その第1号で当時、支部長であった私は「支部長挨拶」で次のように書いています。



「支部長としての私の仕事はまず、九州沖縄地区でのCAJの知名度アップであると思います。少なくとも中・高・大の外国語関係の先生方からCAJまたは「日本コミュニケーション学会」と聞いて「それ何?」と聞き返されないような学会にしたいと思います。そのためには、毎年の支部大会はもちろん講演会や研究会の開催、定期刊行物の発行、支部会員による共同研究などいろいろな活動が考えられますが、何もかも一度にはできません。とりあえず、年に一度、支部大会を開催すること。そして、支部会員相互の情報交換の場としてのこのニューズレターをできれば年2~3回発行できればと思っています」。

ここで私が述べている毎年の支部大会の開催、講演会や研究会の開催、定期刊行物の発行、支部会員による共同研究、ニューズレターの年2~3回の発行のすべてではありませんが、その多くは支部発足から20年を経過した現在も継続しており、今年、第20回の支部大会を私の勤務校長崎純心大学で開催できる事は大きな喜びです。また、ニューズレターもこの23号まで発行され、支部会員の情報交換の場として貢献してきたと思います。しかし冒頭に掲げたCAJの知名度アップはどの程度実現したのでしょうか?CAJまたは「日本コミュニケーション学会」と聞いて「それ何?」と聞き返されないような学会になったのでしょうか。もちろんこれを直接確かめる術はないのですが、この20年で大幅に会員が増えた状況ではない事を考えると疑問符を付けざ

るを得ません。このような「過去」はこの20年間、学会としての実績はそれなりに積んできたものの、「未来」に向かってまだまだやるべき課題が山積しているという事を私たちに突き付けているように思えます。前号のニューズレターで私は今年の支部大会が「これまでの九州支部の歩みを振り返り、支部の現状と課題を明確にし、今後のさらなる発展に向けて何をしていくべきかを共有し、それを実行していけるだけの勇気を得ることができる大会になれば」と書きましたが、今、この思いをさらに強くしているところです。

ニューズレター第1号の支部長挨拶の最後を私は次のように結んでいます。

「あとわずか数年後に迫った21世紀がどのような時代になるにせよ、国境を越えた、地球規模でのものを考えるグローバルな視野が私たちに要求される事だけは確かだと思います。このような時代にCAJ九州支部の会員一人一人が「何」を求め、「どのように」これからの国境無き世界に貢献しようとしているのか、その一端でもこのニューズレターが伝える事ができたら幸いです」。

「CAJ九州支部の会員一人一人が「何」を求め、「どのように」これからの国境無き世界に貢献しようとしているのか」という課題は20年後の現在、ますます鋭く私たちに問われていると思います。

日本コミュニケーション学会九州支部第20回記念大会  
特別講演講師及び講演要旨紹介  
2013年9月28日(土)～長崎純心大学～

講師：片岡 瑠美子 (長崎純心大学人文学部教授兼大学院教授)

プロフィール紹介

担当科目：長崎学、日本文化史、キリスト教文化史、日本キリスト教史特論など

略歴：★上智大学大学院で修士号(日本近世史・キリシタン史)

★ローマ・教皇庁立グレゴリアナ大学教会史学部大学院で「日本司教ルイス・デ・セルケイラ司教の生涯と司牧活動」の論文で博士号取得(教会史学)

研究著書：★科研費による共同研究『キリシタン墓碑—その源流と型式分類のための再調査—』長崎純心大学 2013年

★『キリシタン時代の女子修道会—みやこの比丘尼たち—』(単著)キリシタン文化研究会刊 1967年

★「駐日教皇使節ピオンディ大司教の長崎教区訪問の報告」(『純心人文研究』13号長崎純心大学 2007年など)



演題： 日本のセミナリヨ・コレジヨで  
実践された教育  
(講演要旨)

国際交流とコミュニケーション能力を培う学校教育は、既に16世紀に始まっていた。1540年創立されたイエズス会は、1545年には Collegium Romanum (ローマ学院 現グレゴリアナ大学の前身) をすべての青年の教育のために、1546年 Collegium Germanicum をドイツの司祭養成ために開設した。この教育制度はヨーロッパ各地に広がっていくイエズス会の学校で取り入れられ、1554年だけでも39の新しい学校が許可された。

1579年来日したイエズス会巡察師アレッサンドロ・ヴァリニャーノは、日本における宣教活動には日本人宣教師の養成が必須であり、日本人にはその能力があると確信し、ヨーロッパのイエズス会学校制度「セミナリヨ」「コレジヨ」を1580年に開設した。1582年から1590年まで旅した4人の天正遣欧少年使節はセミナリヨで学んでいた。ローマ教皇、スペイン・ポルトガル国王、貴族たちの前で堂々と挨拶を述べ、会食を楽しみ、ローマ学院の学生たちと交流することができた。マカオから一人旅でローマまで行き、イエズス会司祭となって帰国したペトロ岐部カスイは殉教の時まで宣教の使命を貫いた。かれらを育てた日本の「セミナリヨ」「コレジヨ」の特色ある教育をみていく。



特別寄稿

これまで～そして～今：追想

橋本 満弘 (前西南女学院大学教授—CAJ 第8代会長：平成5-7年)

逍遥自在、想起すれば小生が CAJ (当時は CAP) の会員となったのは帰国した1973年の10月でした。これは在米中に大学図書館で偶然に Takehide Kawashima and Wayne H. Oxford 両氏の共同執筆による“Speech Education in Japan” と題したア－ティクルが *International Studies of National Speech Education System. Vol. I : Current Report on Twelve Countries.* (1970年出版かと記憶) に掲載されていたこととの出会いが契機でした。この領域の研究が我が国では殆ど見られなかった当時の状況の中で帰国後、直ちに執筆者の一人でこの学会創設者である川島彪秀先生とお会して CAJ (当時は CAP) との関わりが始まったのでした。その後、多様な仕事や役割等に諸先輩の方々と関わり、気づけばこの年、2013年となりました。



ご存知の米国の National Communication Association(NCA)の誕生の原点、創設は英語教員によるものでした。即ち、National Council of Teachers of English の“Public Speaking

Section”(34人中17人)のメンバーが分離独立し、National Association of Academic Teachers of Public Speaking を創設(1914年)したことに始まります、—1917年頃までにはアメリカの大学ではスピーチ学部の設立が増加—その後、この組織が National Association of Teachers of Speech (1923年)、Speech Association of America (1946年)へ、そして Speech Communication Association(1970年)を経て現在の NCA (1997年～)に至ったものです(この頃、60人前後の日本人会員登録あり)。

さて、我々の学会(CAJ)の礎石は1971年に設立された日本太平洋コミュニケーション学会(CAP<入会案内1981年版・学会会則、石井敏会長の趣意書等参照>)で後年、このCAPの第15回年次大会での総会(於・日本大学会館—1985年6月14日)で学会名称が日本コミュニケーション学会(CAJ)に満場一致で変更、併せて学会活動の基本方針も既知のように①日本社会におけるコミュニケーションの研究と教育、②諸外国におけるコミュニケーションの研究と教育、③外国語コミュニケーション教育の研究、実践及び普及、④日本語コミュニケーション教育の研究、実践及び普及、⑤国際的なコミュニケーション教育の推進、の五つの柱に基づくことが明示され今日至っています(詳細はCAJ ニュース 第21号<1985年>、また *Human Communication Studies* Vol. XIII, Spring 1986 を参照)。ここに至るまでの学会の発展の足跡は同上誌の川島彪秀、平井一弘先生による「太平洋コミュニケーション学会15年史」をご覧ください。

さて、九州支部はCAJ第23回年次大会1993年(6月25～26日、会場：当時の西南女学院短期大学)の総会で東北支部と共に設立が承認されて今年度は両支部共に第20回大会が目前となっています。当時の畠山均九州支部長、そして関西、関東、東北、北海道の各支部長の“夢を語る”言葉が『これまで、いま、これから』(赤坂和雄編集 CAJ 25周年記念誌)に掲載されています。本当に時の流れは速いものであると改めて実感するもので、CJA 第43回年次大会も目前となりました。

隣接諸科学が横断的に交差する学際的研究領域に共存する会員諸氏の「“私”の学会」、「“おらが”学会」の意識がなによりも学会活動の活性化と発展に帰結していると捉えたいものです。小生、この2013年3月で西南女学院大学を定年退職し、ここに改めて研究・教育に熱意溢れた会員の皆様へ感謝の意を遅ればせながらこの場をお借りし表したいと思えます。承前啓後、殊にCAP時代から今日に至るまで長年に渡って学会、社会、教育界で活動・貢献を通してこの学会の維持、継承、発展に花咲かされて来た先輩先生方を想起するまでもなく藤野良典師の次の言葉が小生には身に染みて実感されるものです。

花は枝によって、支えられ  
枝は幹によって支えられ、  
幹は根によって支えられている。  
その根は土にかくれて外から何も見えない。  
咲いた花を見て喜ぶならば咲かせた根元の存在を知れ。



最後に、今後の学会支部活動の一環として例えば学生のみならず社会人をも対象とした母語あるいは英語でのストーリーテリング、オーラルインタープリテーション大会（フェスティバル、セミナー）、ディベートあるいは弁論大会などいずれかの開催をこの九州支部創立20周年記念を契機に毎年の開催を企画検討してみるのは如何なものでしょうか。学会活動の基本方針の一端にも関わるものです。

(2013年4月30日)



九州支部第9回大会（2002年10月13日、日本文理大学）後の懇親会場にて  
～前列中央が橋本先生、みなさん若い！～



### 事務局長からのお願い：メーリングリスト

事務局長： 丸山 真純（長崎大学）

事務局長としての苦勞話を、という依頼をいただきました。事務局長とは言っても、主な仕事はニューズレターや支部大会案内・パンフレットの送付、金銭の管理程度ですので、それほど苦勞という感じはしないのですが、支部の予算状況を勘案すると、効率化できることはした方がいいというのが、発送物を封入し、糊やテープで封をしているときに感じています。

ですので、ぜひともメーリングリストを軌道に乗せたいというのが現在の事務局長としての願いです。先日もお知らせしたのですが、支部として、会員のみなさまのメールアドレスを確認する手立ては、みなさまに郵便でお尋ねする以外に手立てがないのが実情です。

再度のお願いになりますが、メールアドレスを事務局宛（私の個人アドレスになりますが、masazumi アット nagasaki-u.ac.jp）にお知らせいただくと、助かります。現在、お知らせいただいた方から順に、メーリングリストに登録しています。

50名程度ですので、ご協力をいただければ、すぐに軌道に乗せられると思います。あともう少しで、軌道に乗りそうですので、どうかご協力をお願い致します！

## 地道な紀要編集が『世界』とつながるまで

紀要編集委員長：吉武 正樹（福岡教育大学）



支部紀要『九州コミュニケーション研究（KCS）』の発刊から10年。委員長や裏方として計7号を世に出し、この度新たに編集委員長に就任することになりました。全国誌をあわせ、一人がこんなに集中して学会誌や紀要に関係するのは…という思いもありますが、やるからには任期を全うすべく努力したいと思っています。



今回、編集の「苦勞」話を、という依頼でしたが、苦勞ばかり書いて「後継者」がいなくなると困るので（！）、編集の仕事を紹介しつつ、どんな思いで取り組んできたかを書いてみます。

（1）編集委員長の仕事は、応募原稿を集めるところから始まります。締切は1月末で、支部大会発表者を中心に声かけし、あとはホームページ等で募集をかけますが、これが一つの難関です。「今年は募集定員を満たせるか・・・」という大学の悩みよりも深刻な現状で、まずは大会参加者と投稿者が増えることが期待されます。ぜひともより多くの支部会員の方々に支部という「祭り」に参加していただき、九州からコミュニケーション研究を盛り上げていきましょう！

（2）応募の次は査読に入ります（支部大会発表論文は査読なしでも掲載可能です）。査読の割り振りには慎重を期します。全国誌ほど厳しくなく、しかしアカデミックな水準を保つべく、フェアな査読をしていただくよう気をつけて説明します。結果は査読者の判断に一任しますが、一方で九州支部では「教育的」側面を重視しており、結果にかかわらず論考の何がよく何が悪かったのか、どうすれば改善できるかなど、できるだけ細かいコメントをいただくよう査読者をお願いしています。これは、査読システムを支部の底上げにつなぐ要として、委員長として大切にしてきた点です。

（3）査読結果が戻ってきたら、編集の作業が待っています。全国誌は印刷業者をお願いしていますが、九州支部の統一フォーマットへの編集作業は、実は、編集委員長の手作業です。論の展開、引用の仕方、てにをはや句読点のチェックから、註の作成、フォントの大きさや種類、行のスペースなど、あらゆる箇所を確認・手直します。適当にやっても紀要は出来ませんが、長年やっていると、目に飛び込んできてしまうんです、細かいミスやズレなどが。こうして形が整った紀要に仕立てていきます。この間、著者校正を2度行い、あとは必要に応じて著者とやりとりしながら最終版を仕上げます。表紙、目次、奥付などを作成し、編集委員で最終チェックをし、担当の方に更新をお願いしたところでお役御免・・・となる前に、次の号の募集が始まります。

そんな生活を8年ほど続けてきましたが、昨年理事会で嬉しいことがありました。本学会のホームページアクセスのデータを見てみると、KCSの論文へのアクセス数がかなり上位に食い込んでいることがわかったんです。長年の悶々とした編集作業が、九州支部はもちろん、学会（学界）を支える仕事と直結していると知り、少し報われた気がしました。

全国誌のネット閲覧は有料ですが、個人的にはKCSはこのまま無料であってほしいと思っています



ます。というのも、私が敬愛してやまない内田樹さんが言うように、知性とは本来「贈与」であると信ずるからです。報酬も名誉もありませんが、知を世に送り出す地道な作業が世界のどこかで誰かの知的好奇心をブルッと揺さぶる・・・なんて想像をしてみると、編集委員長も案外悪い仕事ではありません。むしろ、使命感が湧いてくるぐらいです。

と、最後はちょっと大風呂敷を広げて、次を引き継いでくださる志高い方が現れてくれるのを楽しみに待ちたいと思います。もちろん、私もお手伝いしますよ。

## 日本コミュニケーション学会本部での4年間 ～理事会担当・副事務局長として

與古光 宏（九州産業大学）

あれは、今から4年前の2009年3月。当時、日本コミュニケーション学会(CAJ)会長でいらっしやいました今堀義先生より、一通のメールが届きました。

「切なるお願い」という件名に、些か身が引き締まる思いをしながら開封・拝読しました。ここにあったのは、CAJ本部の理事の中で、健康面のご事情から現職を退任なさる方が数名おられ、ついでには小生に副事務局長の一人になって貰えませんか…という、今堀先生ならではの、大変繊細かつご丁寧なお手紙でした。

当時、小生は他学会での役職を幾つか兼ねておりました都合上、今堀先生の「将来的には、事務局長になって貰えたら有難く思います」というご希望には、残念ながらお応え出来そうにない旨をお伝えする一方、小生でもお役に立てるようなお仕事がありましたら、微力ながらお手伝いさせていただきますというご回答を差し上げました。こうして、副会長／事務局長の松本茂先生（立教大学）、副事務局長の河合優子先生（立教大学）と花木亨先生（南山大学）という布陣のCAJ本部事務局に、理事会関連を担当する副事務局長として加えて頂くことになりました。

それから数か月後に、皆様もご存知の通り、その今堀先生との突然のお別れという、悲しい出来事があり、小生も大変なショックを受けました。その数週間後、松本先生からのご発案にて緊急の局長会議が開催され、小生も陪席したのですが、これが、その後現在に至るまで9回出席しましたCAJ本部理事会、および立教大学への出張の最初でした。

小生の役目は、まずは理事会の開催通知ならびに議題を、理事の先生方へメーリングリスト経由にてご案内すること。また、理事会当日に配布予定の資料等の取りまとめも、同時に行います。そしてメインの仕事は、当日速記した理事会の内容を元に、議事録の詳細を作成することです。また、毎年6月開催の年次大会においても、総会の議事録作成を行います。

本部理事の先生方は、会長の宮原哲先生（西南学院大学）を始め、ご経験豊富な素晴らしい経歴の方々ばかり。その中であって最も非力な小生は、当初は内心恐れ多く緊張していたものです。その一方で、理事会中は懸命に速記を取ることに専念すると共に、合間の休憩時間やJR池袋駅までの道すがら、先生方と親しくお話しする機会に恵まれ、皆さん大変温かく接して下さい

いました。一流のコミュニケーション学研究者の先生方と、末端ながらその聲咳に接し大変有難い刺激を頂いて帰路に就くのが、いつしか小生にとっての恒例となって行きました。

議事録の作成は、ご経験のある方でしたらお解り頂けることと思いますが、なかなかどうして容易ならぬ作業です。小生自身の速記と資料を照らし合わせながら、どこまでをどのような文章として残すか…。判断に迷った際には、ご担当の先生に問い合わせ確認したことも、何度かありました。

こうして2期4年間に亘って務めて参りましたCAJ本部・副事務局長の任期も、この6月に開催されます第43回年次大会総会、およびその前日に開催される理事会の議事録作成を持ちまして、ひとまず満了します。途中、何度か体調が優れずに、理事会開催のご案内や議事録点検のお願いが、図らずもギリギリになってしまったこともありました。この紙面を借りまして、関係の先生方にお詫び申し上げますと共に、大変お世話になりました故・今堀先生、宮原先生、そして理事の先生方に、心より厚くお礼申し上げます。

## 第39回SAM (Society for American Music)学会に出席して

宮下 和子 (鹿屋体育大学名誉教授)

2000年のチャールストン、2009年のデンバー、2011年のシンシナティ、2012年のシャーロット(ヴァージニア州)に続き、今年は3月6日から10日までアーカンソー州の州都リトルロックで開催された第39回SAM学会に出席しました。成田からヒューストン経由でリトルロック空港に降り立つと、同州出身のクリントン元大統領夫妻にちなみ、Bill and Hillary Clinton National Airportと改名されていました。



Little Rock, Arkansas

3月6日、登録をすませ、レセプションに出席、ピッツバーグ大学フォスター記念館のルート館長やSAM事務局長のホイットマー教授と1年ぶりの再会です。7-8日は、午前8時半から午後6時半まで、9-10日は午前中、研究発表やパネル討論にレクチャー・リサイタルが続き、18世紀の米音楽、米音楽史、ジャズ、ポップス、音楽と公民権運動、ジェンダーと音楽、教会音楽、映画音楽、オペラ、フォークソング、移民と音楽、ユダヤ音楽、音楽と児童文化等々、その多様性は圧倒的です。また、夕刻からも参加者によるブラスバンド演奏やジャズ・セッションなど音

楽イベントが組まれています。

9日(金)午後には3択の *Friday Afternoon Excursions* が企画され、私は事前に申し込んだ”Civil Rights Tour of Little Rock”に参加しました。Little Rock Central High School (写真右上) に案内したガイド(白人)は、1954年の最高裁判所による「公立学校における人種差別の違法判決」を受け、1957年本校入学を希望し白人の猛反対にあい、連邦軍に守られながら通学を試みた黒人生徒9名(The Little Rock Nine: 写真右下)について詳細に、時に涙ぐみ、解説しました。当時9歳のクリントン元大統領にも大きな衝撃と影響を与えたといえます。



実は今回、別のミッションも携えていました。2008年から立命館大学(京都)「ヴァナキュラー研究会」(代表: ウェルズ恵子教授)の共同研究員を務めていますが、渡米直前の3月1日、運営委員会で提案した企画が賛同を得て、米国から招へい希望のフォスター研究第1人者のルート博士と交渉することでした。日時未定のまま、日本開催の意義を訴え、4日目に”OK”の言葉を頂いたときの感動は忘れられません。

5月初旬、立命館大学国際言語文化研究所主催に決定した企画「ヴァナキュラー文化としてのフォスター歌曲」は、一般公開のレクチャー・コンサートと国際シンポジウムとして12月7日(土)開催される予定です。フォスター研究者でミュージシャンのジョー・ウィード氏(写真左: 右側)からも快諾を得て、いま客員研究員として、ご両名によるコラボ・ステージという長年の夢の現に向けて、コーディネーター業務が続いています。



## 産学連携活動報告



大分のシンボルマーク「めじろん」で～す!

清水 孝子 (日本文理大学)

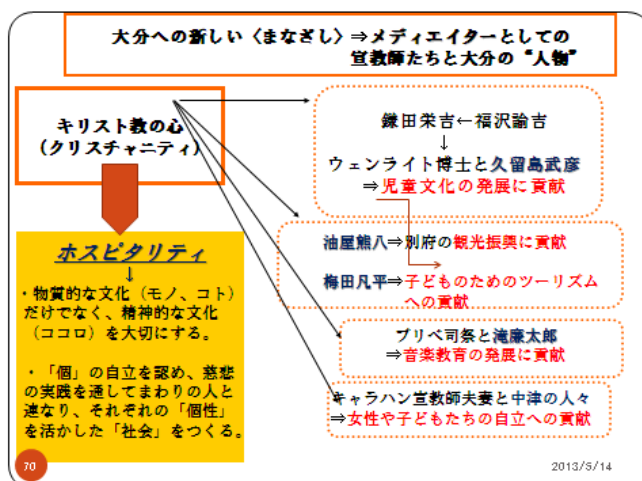
勤務校の教育理念に「産学一致」が掲げられています。確かに、昨今の大学教員の活動範囲は、学外を超えた領域へと拡大してきていることは事実です。「産学連携」・「産学共同」とは、ビジネスの世界と大学の教育・研究活動が共同連携するということなのでしょうが、そのバランスが鍵になるだろうと思われます。ビジネス側の要求だけで教育・研究が行われるならば、学問の自由が危険にさらされることにもなるでしょう。とはいえ、実社会から離れた大学内だけで、教育・研究活動が自己完結することになっても、問題になるでしょう。そのことは学会活動にもいえることではないでしょうか。開かれた学会活動とは何か、今問われている問題のようにも考えます。



ところで、大分県の一企業「大分県信用組合」が、2012年3月、「地域社会・顧客と共に、地域にねざした価値を創出しながら、地域・経済の発展や中小企業の経営的向上を目指した“けんしん大学”」を創設しました。勤務校も、講師陣を派遣協力している「産学連携」モデルの大学です。



筆者も、2013年3月9日の「地域振興」の分野で講師を務めました。「けんしん大学」側から、「“おおいた”の地域資源（産業・文化・歴史・人材など）を見つめ直し、地域が有する潜在的な力を再認識することで、“おおいた（地方）”が取り組むべき課題と、担うべき新たな役割について考えてみませんか」というテーマを与えられました。ここ数年、明治期のキリスト教宣教師と大分の人々の交流について調査を進めて来ましたので、「大分におけるキリスト教宣教師たちのミッション—その歴史と今日的意味を考える—」というテーマで、70分間ほど話しをしました。明治期に活躍したキリスト教宣教師たち、特に、キャラハン宣教師夫妻、ウェンライト博士、プリベ司祭などとつながりを持った大分に住む人々が、後に、それぞれの分野（児童文学・観光・音楽・女性の自立）でのリーダーとして情報発信していきました。「目に見える形として情報を発信していった大分の人々の活動の根っこには、宣教師たちから教えられた共通の“ホスピタリティ”の精神があったのではないのでしょうか」と締めくくりました。上の図は、最後に使ったスライドです。



今回は、2013年9月14日に、「大友宗麟を通して考える異文化コミュニケーション」というテーマで講演予定です。

## 支部会員紹介

石川 直美（琉球大学大学院）

御総様、今日拝なびら。（「ぐすーよー、ちゅーをうがなびら」と読み。「皆様、こんにちは」の意味）。我んねー、石川直美んでい言ちよーいびん。（「わんねー、いしちやーなおみ んでい言ちよーいびん」と読む。「私は、いしかわなおみと申します」の意味）。見知っちょーてい呉みしえーびり。（「みーしっちょーてい、くいみしえーびり」と



読み、「お見知りおきくださいませ」の意味)。私は、2013年4月より、琉球大学大学院 人文  
学部社会科学部 比較地域文化専攻 博士後期課程に在籍しています。現在、沖縄に住んで  
いる日本国籍とアメリカ国籍の親を持つ子どもの言語とアイデンティティについての研究に取り  
組んでいます。彼らは、いわゆる「ハーフ」と呼ばれることが多いのですが、彼らの中には、  
「ハーフ＝半分であり、我々は、半分ではない」と主張する人々もいます。これまでは、社会か  
ら様々な呼称を付けられてきた彼らでしたが、数年前から、我々を「アメリカ系うちなんちゅ」  
と呼んでほしいとの声があがってきました。アメリカ系うちなんちゅの人々にとって、言語と  
は、どのような意味を持っているのかということが関心のひとつであります。また、これまでの  
研究の結果、彼らは、「うちなんちゅ（沖縄人）」というアイデンティティを主張している方々  
がいらっしゃいました。言語とアイデンティティは、密接に関係しているといわれていますが、  
沖縄人のアイデンティティを主張しながらも、沖縄語を話せる人は、数人でした。むしろ、う  
ちなんちゅである人々も、残念ながら、うちなんちゅを話せる人は、少なくなっています。この  
背景には、「言語政策」という歴史があります。そこで、アメリカ系うちなんちゅの人々が主  
張する、「うちなんちゅとしてのアイデンティティ」と「言語」がどのような関わりがあるの  
か、とても興味深く思っています。

沖縄社会では、アメリカ系うちなんちゅの方々のことが理解されているとは決して言い難い  
のです。沖縄に米軍基地がある限り、日本とアメリカの国籍をもつ子どもたちは、生まれてく  
ると考えています。アメリカ系うちなんちゅのアイデンティティ研究が、現在、アイデンティ  
ティの危機で悩んでいる彼らにとって、微力ながらも手助けになればと思っています。

これから、更なる研究を重ねて参りたいと思っています。ご指導の程、ゆたさるぐとう（宜し  
く）うにげーさびら（お願いします）。

#### 筒井久美子（立命館アジア太平洋大学）

CAJ九州支部の皆さん、こんにちは。今年3月熊本学園大学を退職し、4月より別府市の立命  
館アジア太平洋大学（APU）に勤務しております。11年間勤めた大学を離れるということでは  
不安もありましたが、佐藤勇治先生や宮原哲先生からご助言や励ましを頂き、思い切って新天  
地の可能性にかけてみることにしました。APUでは教育開発・学修支援センターに所属し、  
国内学生と国際学生対象の初年次教育の授業を担当しており、秋学期にはそれに加え異文化  
コミュニケーションの授業も担当させて頂く予定です。毎日新しいことの連続で自分の未熟  
さを痛感しておりますが、学ぶことが多く、よりいっそう教育、研究に研鑽していきたい  
と心新たにしております。これからも引き続き、ご指導ご鞭撻をよろしく願いいたします。





## 支部会員異動報告

橋本 満弘会員（西南女学院大学を 2013 年 3 月定年退職）  
宮下 和子会員（鹿屋体育大学を 2013 年 3 月自己都合退職、同大名誉教授）  
筒井 久美子会員（熊本学園大学を 2013 年 3 月退職、4 月より立命館アジア太平洋大学研究開  
発・学修支援センター所属）  
平野 順也会員（2012 年 9 月より熊本大学所属）

### 編集後記

今年 9 月 28 日、長崎純心大学で CAJ 九州支部の第 20 回記念大会が開催されます。今回のニューズレター 23 号は、その記念大会にふさわしい濃密な内容になりました。ご執筆の先生方のご協力、大変ありがとうございました。伊佐支部長、宮下副支部長のご指導のおかげで完成に至りました。ありがとうございました。20 年間を振り返りながら、学会活動としても、個人の活動としても、どこへ向かっていくべきかを考えることができたように思います。当日は、他の支部からもたくさんの人たちが長崎を訪れてくださることを切に願っております。今後とも、どうぞよろしく願いいたします。（清水 孝子）